

オランダにおける中国系コミュニティの歴史の変遷とその特徴 —イギリスとフランスとの比較から—

The Historical Development and Characteristics of the Chinese Communities in the Netherlands: The Comparison among the Netherlands, the U.K. and France

山本須美子
Sumiko YAMAMOTO

はじめに

中国の改革開放政策以降1980年代から中国本土からヨーロッパへの移民の流入が増加したことを背景に、ヨーロッパの中国系移民を対象とした研究が活性化した。その共通点は、一国研究に留まるのではなく、国家を超えたより広い枠組みから中国系コミュニティの展開を捉えようとしていることである¹。

EU内で中国系人口が多いのは、イギリスとフランスであり、オランダは第三位である。イギリスの中国系人口は2001年国勢調査では約25万人 [Office for National Statistics 2001]、フランスの中国系人口は、1990年代に20万人を上回り、2002年に30万人に達した [Marc 2002: 121]。オランダは、中国系人口を明確に示す統計はないが、1990年代後半で約10万人である [Li 1999a: 42]²。本論は、オランダにおける中国系コミュニティの歴史の変遷を検討し、コミュニティの特徴と新移民の流入による変化をイギリスとフランスの場合と比較検討することを目的とする。イギリスとフランスにおいては、既に中国系アソシエーションの変化を明らかにすることを通して歴史の変遷を跡付け、新移民の流入が中国系コミュニティに及ぼした影響について考察した [山本 2009a, 2009b]。本論は筆者によるこれらイギリスとフランスにおける研究 [山本 2009a, 2009b] を基盤としてオランダの場合と比較する。それゆえ、オランダの中国系移民に焦点を当てているが、ヨーロッパというより広い枠組みに

1 近年のヨーロッパの中国系移民を対象とする研究動向については山本 [2008] を参照。

2 オランダ政府統計局 (CBS) の2010年10月統計によると、オランダの総人口は16,574,989人で、在住外国人は計3,359,603人で、総人口の20.3%に及ぶ (Netherlands Central Bureau of Statistics HP)。中国にルーツにもつ中国系人口を示す統計はないが、リーが1990年代後半で約10万人であると指摘していることを考えると [Li 1999a: 42]、現在は十数万人になっているといえる。

において中国系移民を捉えようとする近年の研究と軌を一にする。

オランダの中国系コミュニティは、1980年代以前はオランダの移民研究においてほとんど注意が払われなかった。オランダの中国系移民に関する研究は極めて少なく、ベントンとピークによる中国系コミュニティを包括的に捉えた論文 [Benton and Pieke 1998] と、リーによる中国系アソシエーションに焦点を当てた著書が代表的なものである [Li 1999a]。リーは中国のオランダへの移民送り出し村においても調査を実施している [Li 1999b]。これらの研究は1990年代後半に発表されたが、近年若い研究者による、浙江省出身者のアイデンティティの世代的変容について論じた研究 [Kim 2009] や、中国系第二世代若者のアイデンティティ形成について論じた研究 [Witte 2009] もある。

オランダの中国系コミュニティはフランスやイギリスのそれに比べると規模は小さい。しかし、イギリスの中国系コミュニティの主流を占める香港からの移民も、フランスの中国系コミュニティに戦前と新移民として流入した浙江省青田と温州からの移民も、オランダにも流入している。オランダの中国系移民に関する従来の研究は、そのみを対象としてきた。本論では、オランダの中国系コミュニティの特徴と新移民流入による変化をイギリスとフランスの場合と比較することにより、その相違点と共通点を移住先で生まれ育った第二世代のアイデンティティ形成や「中国文化」の継承と結び付けて検討し、文化とアイデンティティ形成に関わる研究課題をトランスナショナルな枠組みから捉えることを試みる。

なお、本論は、2009年9月と2010年9月と2011年9月における筆者によるアムステルダムとユトレヒトとロッテルダムでの現地調査に基づいている。

I. 中国系コミュニティの歴史的変遷

2010年はオランダへの中国系移民が100周年を迎えた記念する年として、記念する催しが各地で開かれた。本章では、中国系移民の100年間の歴史的変遷をリー [Li 1999a] に倣って、1. 1949年中華人民共和国建国以前、2. 1950年からスリナム独立1975年まで、3. 1976年から現在まで、の三つに区分して検討する³。

1. 1949年中華人民共和国建国以前

リーは、収集したすべての文献から、20世紀初期まで、オランダには中国人は在住しなかったと指摘している [Li 1999a: 27-28]。オランダに最初に移住した中国人は、二つの集団に分類できる。第一は、プラナカンとして知られている留学生で、かつてのオランダ領東インドからの再移住者である。プラナカンとは17世紀以降中国からオランダ領東インドに渡った人々の子孫で、長期にわたり現地社

3 I章の記述は、Li [1999a: 27-52] と Benton and Pieke [1998: 125-167] に依拠している。

会と文化的に混交をした人々を示す⁴。プラナカンは貿易で成功し繁栄し、子どもの教育に熱心で、19世紀初期から子どもをオランダに留学させて高等教育を受けさせた。特に1908年、オランダ領東インドにオランダ語を教授語とする学校が設立されて以降、オランダへの留学生数が増えた。1911年から1940年の間に、オランダに留学したプラナカン留学生は、総計約900人である。ほとんどの者が勉学を終えるとオランダ領東インドに帰って、医者や法律家や技術者や官僚になった。1911年に約20名のプラナカン留学生によって設立された Chung Hwa Hui は、オランダの中国人による最初のアソシエーションであり、オランダ語で定期刊行物を発行した。

第二は、広東省宝安や浙江省温州や青田から直接オランダに移住してきた人々である。先にオランダに来たのは広東省宝安出身者である。彼らの多くは、オランダの船会社に安く雇われた船乗りであった。1910年には196人であったが、1915年には2,165人に増加した。1911年に勃発したオランダ人船乗りによるストライキを打破するために、イギリスからオランダの船会社によって多くの中国人船員が連れてこられたためである。オランダ人船員よりも中国人船員は安く雇われ、オランダ人にとっては自分達を脅かす危険な存在として「黄禍」と捉えられた。彼らは次第にオランダに長期滞在するようになり、最初は港町ロッテルダムに、その後アムステルダムに住みつき、最初の中華街を形成した。

初期に中国本土から直接オランダに移住してきたもう一つの集団は、浙江省温州と青田出身者である。浙江省は20世紀初めからヨーロッパに移民を送り出し、1980年代後半までにヨーロッパに在住する浙江省出身者は約100万人となった [Thunø 1999: 160]。なかでも青田と温州は、耕作地が少なく農業だけでは生計を立てることができずに、古くからヨーロッパに移民を送り出していた地区である。これら浙江省出身者の多くは、一旦ヨーロッパに移住しても、中国の故郷に帰るものも多く、ほとんどが単身男性であった。

当時の浙江省出身者のオランダでの生活は厳しいものであり、ほとんどが安いネクタイやネックレスやおもちゃを各戸に売り歩く行商人であった。船員であった広東省出身者は石炭火夫として雇われていたので、経済不況や船燃料が石炭から石油に切り替わると解雇され、浙江省出身者と同じ行商人となった。浙江省出身者と広東省出身者の間には競争もあり、行商では人種差別も受けマーケットは制限され、生計を立てるのは容易ではなかった。1930年代の経済不況下で生活はさらに厳しいものになり、生きていくためにピーナツケーキと呼ばれるお菓子を売り歩く者が増加していった。当時のオランダでは中国系移民に対してピーナツケーキ売りとしてのステレオタイプが形成された。しかしピーナツケーキ売りは競争が激しくなり、経済不況に対する一時しのぎでしかなかった。1930年代後半には、夢破れて故郷に帰ったものもいれば他の国に移住したものもいた。さらにオランダ当局はピーナツケーキ売りを不衛生であるとし、ロッテルダム警察は数百人の中国人を国外追放し、中

4 文化的に現地化した「プラナカン」に対し、新来で中国文化を色濃くとどめているのを「トトツ」とする区分が広く知られている。

国人人口は激減した。1920年代にはヨーロッパ最大の中華街であったロッテルダムの中華街は、1940年代に消滅した。

第二次世界大戦中オランダはドイツに占領され、中国系移民は故郷との絆を断たれ、オランダでの生活はさらに過酷になり、第二次世界大戦が勃発した時、1930年代初めにはオランダに2,000人以上いた中国系移民は1,000人以下に減った。

2. 1950年からスリナム独立1975年まで

第二次世界大戦後の経済復興の中で、中国系移民は飲食業という新しい分野で成功の道を開いた。特に1960年代と70年代はかつて経験したことのない繁栄を謳歌した。1947年にはアムステルダムやロッテルダムやハーグに全国で23件しかなかった中国料理レストランは、国中の田舎の小さな村にまで広がり、1970年代後半には全国で約2,000件に達した。また、1949年のインドネシアの独立後、オランダ領東インドに長い間暮らしていたオランダ植民地政府高官が帰国し、彼らがインドネシアの味を恋しがったことから、中国料理にインドネシア料理を加えたいわゆる「中国-インドネシア料理」がブームになった。

第二次世界大戦直後の中国系コミュニティには、広東省出身か浙江省出身の男性が数百人残っていてオランダ人女性と結婚していたが、中年以上になっていた。子ども達は中国語がほとんど話せず飲食業に就こうとしなかったため、故郷からコックやウェイターを呼び寄せて人手不足を補おうとした。しかし、1949年に成立した新中国政府は移民を厳しく制限する政策を採ったため、中国の故郷浙江省からの移民によって人手不足を補うことは難しかった。それゆえ、浙江省出身のレストラン店主は中国本土ではなく香港からの移民によって人手不足を補い、その結果、戦後オランダの中国系コミュニティは、香港出身者で膨れ上がりコミュニティの中心となった。

香港からの移民流入のピークは1960年代で、二つのサブグループに分かれる。第一は香港土着の農夫で、1958年から1961年に新界でのいわゆる‘野菜革命’によって農業で生計を立てていけなくなり単身で出稼ぎに出た者である。多くが宗主国でありレストランブームに沸くイギリスに連鎖移民として移住したが、飽和状態になると、よりよい機会のあるオランダに移住先を変更した。第二のサブグループは、新中国成立後に中国本土から香港に共産圏を逃れてきた新来者であり、広東省宝安出身者が主流であった。第二次大戦前にオランダに移民してきていた宝安出身者が、彼らのオランダへの移住を手助けした。彼らはオランダに再移住後は宝安人ではなく香港市民となった。

このような香港からの移民の流入の結果、香港文化がオランダの中国系コミュニティを支配するようになった。また、浙江省出身のレストラン店主は、香港出身の雇い人とコミュニケーションをするのに広東語を勉強せざるを得なく、中国系コミュニティの主流言語も広東語となった。

この時期は香港以外の他の国々からも中国系移民が流入し、中国系コミュニティは多様性を増した。1960年代と70年代には、20世紀初めに温州からシンガポールに移住した人々や中国系マレーシア人もオランダに再移住しレストランに雇われた。また、1949年のインドネシア独立後、約250,000人

のオランダ領東インドの住民は国外に出たが、その中には中国系もいて、オランダに再移住した者もいる。1948年には約400人のプラナカンがオランダにいたが、1957年には1,400人に増加した。さらに、オランダ植民地であったスリナムの1975年の独立後、1970年代後半に約4,000人の中国系スリナム人⁵がオランダに移住した。時代区分としては次の次期になるが、1975年から1982年の間にはオランダ政府は6,500人のベトナム難民を受け入れたが、その4分の1は中国系であった。以上のような中国本土以外からの移民の流入によって、1955年には約2,000人であった中国系人口は、1975年には10,000人を超えた。

3. 1976年から現在

中華人民共和国建国1949年から1970年代初期までは、一旦中国本土からヨーロッパへの移民は停止していたが、1970年代初期から特に温州と青田から本格的に移民流入が再開した。中国本土からの移民は、1973年には2,804人、1974年には3,103人、1975年には3,390人で、1978年の改革開放政策の前から増加している。これは、政策転換の数年前から海外移民に対する政策が転換していたからである [Pieke 1988: 15]。流入が本格化した1984年から1995年に温州から移民した人は約70,000人で、ほとんどがヨーロッパに移住している。その理由として、中国の改革開放政策以降、海外移民が祖国への裏切り者から羨望の的へとその位置付けが変化したことや、移民制限が緩和しパスポートを得やすくなったことが挙げられる。また、リーは1996年に温州で実施したフィールドワークに基づいて、「ヨーロッパへ移民すればお金持ちになれる」という共通認識を生み出すような「移民文化」が温州にはあり、それが、温州の経済状況が良くなり、中国でもヨーロッパでも移民制限をされても、ヨーロッパへの連鎖移民が続く要因であると指摘している [Li: 1999b]。

しかしながら、飲食業ブームは1980年代以降は続かなかった。国中に広がった中国料理レストランのマーケットは飽和状態になり、また経済不況で人々が外食を避けるようになったこと、中国料理以外のエスニック・レストランの急増、中国料理レストランの衛生問題スキャンダルや中国人犯罪組織の報道が中国レストランの評判を落としたこと等が理由として挙げられる。1970年代後半から1980年代の初めまでは年間約17%も増加していた中国料理レストラン数は、1980年代後半からはほとんど増加していない。レストラン経営者は特に従業員数を減らしてコストを抑えようとしたので1987年の中国料理レストランの失業者数は従業員全体の20~25%に達した。閉店するレストランも現れ、新移民もオランダに移住してきてても以前のように職を得ることが難しくなり、お金を貯めてレストラン経営者になる夢をかなえることも容易ではなくなった。

他方で、浙江省だけではなく、中国東北部や福建省からオランダへの移民も増えている。1990年代

5 オランダ植民地であったスリナムの1975年の独立後オランダに移民してきた中国系スリナム人は、1980年代には約4,000人、1990年代には5,000人になった。オランダに再移住した中国系スリナム出身者は、同じ再移住集団でもオランダ領東インドで世代を重ねたプラナカンと違って、ほとんどが中国から移住した第一世代とその子孫である [Benton and Pieke 1998: 135]。

後半以降は、特に中国東北部出身者が増えている。中国東北部出身者は都会の中産階級出身のほとんどが合法移民で、留学生としてヨーロッパに来て学業終了後も留まっている人も多い。2011年9月に筆者が聞いたところによると、この5年くらいは遼寧省沈阳市から来た女性がヘアサロンやマッサージ店を開業したり、50歳代の女性が不法で住み込みのお手伝いとして働いているとのことであった。

シャンは、2004年から2007年に移民送り元である中国東北部において移民斡旋業者や移民希望者や役人の総勢約70名へのインタビューを実施し、移住斡旋業者は、移住を商品化し斡旋業者の手に委ねるものに行っていることを指摘している [Pieke and Xiang 2008: 20]。シャンによると、中国東北部出身者のほとんどが、移民斡旋業者を通して手に入れた本物のパスポートとビジネスビザで移民している [Pieke and Xiang 2008: 11-21]。今日の中国系新移民は犯罪とはそれほど結びついていなく、社会経済的にも移住の経路からみても、不法と合法移民を区別することは難しいことが指摘されている [Marc 2002: 125]。

II. オランダの中国系コミュニティの特徴

本章では、オランダの中国系コミュニティの特徴を、出身地別構成や居住形態や職業等の視点からイギリスとフランスのそれと比較検討し、それが第二世代のアイデンティティ形成過程に影響を及ぼしていることを示す。

1. 中国系コミュニティの構成

1980年代以前は香港出身者が主流であったオランダの中国系コミュニティは、1970年代後半から浙江省出身者と「その他」が増加し、統計数字はないが、現在の中国系コミュニティは、香港出身者と浙江省出身者と「その他」の3つのカテゴリーがおおよそ3分の1ずつで構成されているといわれる。「その他」にはプラナカン、中国系スリナム出身者、ベトナム難民、中国系マレーシア・シンガポール出身者、留学生・国際結婚をした人等が含まれる。1960年代から70年代にオランダに流入した香港出身者は、同じ時期にイギリスにも流入し、戦前と1970年代後半からオランダに流入した浙江省出身者は、フランスにも流入している⁶。さらにベトナム難民の流入や近年の留学生や国際結婚の増加は、イギリスとフランスでも共通にみられた。つまり、出身地別の構成からみると、イギリスとフランスの中国系コミュニティは異なっているが、オランダの中国系コミュニティは、イギリスとフランスの両方に流入した人々から成り立っている (表1参照)。

6 イギリスとフランスの中国系移民の歴史の変遷は山本 [2007a: 177-179, 181-185] 参照。

表1 オランダ・イギリス・フランスの中国系コミュニティの出身地別構成

	オランダ	イギリス	フランス
戦前	ブナカラン 広東省出身者 浙江省出身者	広東省出身者	華北・華中出身者 中国本土留学生 浙江省出身者
1950年代 ～70年代	香港出身者 マレーシア・シンガポール出身者 ブナカラン スリナム出身者 ベトナム難民	香港出身者 マレーシア・シンガポール出身者 ベトナム難民	インドシナ難民
1980年代 以降	浙江省出身者 中国東北部出身者	福建省出身者 中国東北部出身者	浙江省出身者 中国東北部出身者

出典：筆者作成

2. 飲食業への集中と散住

オランダにはアムステルダムやロッテルダムにチャイナタウンはあるが、居住地ではなく、中国料理レストランや商店が集まる商業地域である。また、オランダの中国系移民は5、6割が飲食業に携わり [Benton and Pieke 1998: 142]、レストランが集まって競合しないため、全国の田舎の隅々まで散らばって住んでいる。このような飲食業に集中し、全国に散住しているというオランダの中国系コミュニティの特徴は、イギリスのそれに共通している。イギリスもロンドンとバーミンガムとマンチェスター等各地にチャイナタウンはあるものの商業地区であり、中国系移民は全国に散住している。1960年代をピークにイギリスにもオランダにも連鎖移民によって流入した香港出身者は、両国において中国系コミュニティの主流となり、飲食業に集中し、全国に散住するという同じ特徴を有している。文氏宗親会 (Man's Clansmen Association) は、ワトソンが移民母村である香港の新田 (San Tin) における1969年から1971年にかけての20ヶ月間の調査に基づいてその詳細を明らかにした組織である [Watson 1975]。ロンドンとアムステルダムに事務所があることは、文氏がイギリスとオランダに移民したことを示し、筆者は両都市に文氏二世の知人を持つ。1980年代以降、イギリスにもオランダにも新移民が流入し、出身地も職業も多様化したが、両国とも飲食業が多く全国に散住するという特徴は保持している。

他方、フランスの中国系移民の職業は、イギリスやオランダのように飲食業に集中しておらず、既製服縫製業や工場労働者など多様である。また、フランスには中国系移民の集住地区がある。特にパリにはインドシナ難民も含めたアジア系移民の集住地区が3ヶ所ある⁷。戦前と1970年代後半以降にオランダとフランスに移民している浙江省出身者は、職業に関しては、戦前は両国において行商人で

7 パリの中国系集住地区は、第一がインドシナ難民が主に居住する13区のポルト・ド・ショワジー周辺、第二は皮革製品や貴金属や宝石を扱う商店が集中している3区のタンブル通り周辺、第三は温州系移民、カンボジア出身の潮州系、香港系の人々が1970年代を中心に移り住んだ20区のベルビル地区である。

あったが、1970年代後半以降に流入した新移民は、オランダでは飲食業に吸収されたが、フランスの場合は飲食業よりも既製服縫製業の方が多く多様である。つまり、フランスとオランダの浙江省出身者を比較すると、職業も居住形態も異なっているので、イギリスとオランダの香港出身者のような共通点はない。また、フランスの中国系移民は集住しているので、イギリスやオランダよりはコミュニティとして可視化されている。

3. 第二世代のアイデンティティ形成

オランダもイギリスも20歳代以上の第二世代の親は、香港か近隣地区出身者がほとんどである。前述したように、香港出身者は1960年代から70年代の中国料理に関わる飲食業ブームを背景にイギリスやオランダに移民した人々である。広東語か客家語を話し、イギリスでもオランダでも中国系コミュニティの主流となっている。同じ香港出身者がイギリスとオランダという異なった国に移住したが、中国系コミュニティが飲食業に集中し散住するという共通の特徴を有していることによって、移住先で生まれ育った第二世代のアイデンティティ形成過程に共通性をもたらしている。

2010年9月に筆者がインタビューをしたオランダで生まれ育った第二世代であるN氏とC氏（二人とも40歳代男性）は、両親が香港の新界と接する深圳の出身である。N氏の父親は1948年に、母親は1959年にオランダに移民し、最初はレストランに雇われて働いてお金を貯めた後、共同経営でレストランの経営者になったが、今は引退している。C氏の両親も1950年代に父親が先に、数年後に母親がオランダに移民し、レストランで働いた後にレストラン経営者となり、数年前に温州出身者に売却し引退している。N氏は大学院博士課程修了、C氏は大学を卒業し、第一言語はオランダ語である。二人とも田舎町の学校には中国人は自分の兄弟しかいなく、自らをオランダ人と意識していた。N氏によると親が香港出身の第二世代は、多くの者が10歳頃から親のレストランを放課後や週末は手伝った経験を持っている。思春期にはオランダ人の友人は外出して遊んだりできるのに、なぜ自分は店を手伝わなくてはいけないのかで親とよく言い争った。そうした親の店を手伝った経験が、親と同じ職業には就きたくないという思いを強め、また親も子どもの教育に熱心であり、第二世代は高等教育を受けホワイトカラー層に進出している。そして、大学の中国系サークル等を通して中国系の人と接するようになると、オランダ人というよりも居心地の良さを感じ、N氏もC氏も自らの中国人としてのアイデンティティを強めていったという。N氏はオランダ人の恋人とも付き合った経験があるが違和感を抱き独身で、C氏は香港出身者と結婚している。また筆者が2011年9月にインタビューをしたA氏は、高学歴でオランダのトップ企業に就職するまで自分をオランダ人と意識していたが、会社で上司に中国人だから内気でプレゼン能力がないと云われ昇身出来なかったことから、中国人としてのアイデンティティを強めたという。この3名のように成人になって中国系の人との付き合いを深め中国人としてアイデンティティを強める人が多いが、両方のアイデンティティを持つ人や、少数派ではあるがオランダ人としてのアイデンティティしか持たない人もいる。

ここでは詳述は避けるが、筆者は、イギリスの中国系第二世代31名とフランスの中国系第二世代21

名へのインタビュー調査に基づいて、中国系二世代が二つの文化の境界でどのようにアイデンティティ形成をしているのかを比較検討した [山本 2007b]。3 国の中国系二世代のアイデンティティ形成過程を比較した場合、オランダの場合は、イギリスの場合と共通していることが指摘できる。その共通点とは、全国に散住しているので、学校では自分以外に中国人がおらず、また親の店を手伝った経験が親と同じ飲食業に就きたくないという思いを強め、親も子どもの教育に熱心であり、学業成績が良く高等教育を受ける率が高く、ホワイトカラー層に進出している。またそうした経験の共有が、大学サークル等で中国系二世代同士が会える機会が多くなる成人以降、中国系二世代同士の人間関係を居心地良いと感じさせ、中国人としてアイデンティティを強め、中国系二世代同士の結婚が多い⁸。他方で、イギリス人でもあり中国人でもあるという両方のアイデンティティを持つ者や、イギリス人やオランダ人としてのアイデンティティしか持たない少数派もいて、個人の経験を通してアイデンティティのあり方が多様であることも共通している。

フランスの中国系二世代の場合、親の主流は中国系インドシナ難民である。祖父母の代が中国からベトナムやラオスやカンボジアに移住し、政情不安によって1970年代中頃にフランスに再移住してきた人々である。二世代の中には「中国人」だけではなく、「アジア人」や「カンボジア人」等に自ら位置づける事例もあり、集住地区があることによって、中国人が半数近くを占める学校に通った者もいた。飲食業に集中しておらず集住地区があるというコミュニティの特徴によって、フランスの二世代は学校で自分だけが中国系であったり、親の店を手伝うという経験を共有するというのではなく、オランダやイギリスにおいて指摘したアイデンティティ形成過程の共通点は指摘できない。

Ⅲ. 新移民流入による変化

ここでは、まずオランダへ流入した新移民の主流である浙江省出身者の概要について述べた後、オランダへの新移民の流入が中国系コミュニティにもたらした影響を、中国系アソシエーションや中国語補習校の変化という視点から、フランスとイギリスの場合と比較考察する。

1. 浙江省出身者

オランダにおける浙江省出身者、特に温州と青田の出身者は、20世紀初期から行商に携わっていたが、1970年代後半以降にオランダへ移住した浙江省出身者は飲食業に携わる人が多く全国に散住した。温州系移民の世代的アイデンティティの変容について論じたキム [Kim 2009] は、自らも浙江省に出自をもつ。彼女の曾祖父は1934年、20歳頃に青田からオランダに渡り宝石やピーナッツ等の行

8 イギリスの中国系の子どもの学業成績については Archer and Francis [2007]、オランダの中国系の子どもの学業成績については Pieke [1991] を参照。

商後、飲食業に携わったが、経営者になることはできなく、中国に戻ったりヨーロッパの他の国に移動したりしていた [Kim 2009: 26]。中国に残されて母に育てられたキムの祖父は、1958年に10代後半にオランダに渡り初めて父であるキムの曾祖父に会い、キムの父もまた同じように17歳で中国からオランダに移住した。キムは4世代目になるわけで、自らの家族の歴史はオランダの浙江省出身者の中では例外的であるとしている [Kim 2009: 27]。筆者は、キムの家族のように戦前から浙江省と中国を行ったり来たりしている移住経緯をもつ浙江省出身者にフランスでも出会った。

オランダの浙江省出身者の中での多数派は、1970年代後半から80年代にかけてオランダに来て飲食業に吸収された20歳代から30歳代の男性であり、ほとんどが1960年代から1970年代にオランダに移住した親族のつてを辿っていた。キムの浙江省出身の第一世代へのインタビューによると、当時の中国での生活はとても貧しく厳しかったので、皆がより良い暮らしを求めて海外に出たがった [Kim 2009: 28]。彼らは中国に家族を残して移住し稼いだお金を故郷へ仕送りをしたので、故郷の家族の生活は豊かになり、それが故郷の人々の海外移民への意欲を高めた。そして、お金を貯めてオランダでレストラン経営者になると家族もオランダに呼び寄せた。筆者が2010年に話を聞いたオランダに10数年住む中国人によると「温州人は中国のユダヤ人」と言われているという。リーも浙江省出身者は故郷との絆を保ち、移住先でも故郷でも社会的上昇することへの意欲が強いと指摘している [Li 1999a: 48]。かつて広東省出身者によって占められていた主要都市の大きな中国料理レストランは、浙江省出身者による経営も増えている。また、最近ではオランダ語で「Wok」(中華鍋)を冠した中国料理店が流行っている⁹。

さらに浙江省出身者には不法移民も含まれていて、特に1990年代以降に入国している。1990年代以前はオランダでは不法移民も合法的に働くことができ、移民法も厳しくなく不法移民への待遇は合法移民とそれほど違いがなかった。しかし、1998年移民法以降、不法移民への取締りは強化され、入国が難しくなった [Kim 2009: 32]。2011年に筆者が中国系アソシエーションのリーダーに聞いたところでは、現在中国料理レストランには不法移民取締りのための検閲が週に一回程度はあり、不法移民を雇っていた経営者には多額の罰金が課せられるので、飲食業では不法移民は雇えなくなっているということであった。オランダにおける中国出身の庇護申請者は2007年には270人、2008年には600人、2009年には340人である [Netherlands Central Bureau of Statistics HP]。これに対してフランスでは1999年に5,165人の中国人がフランスで庇護申請をし [Marc 2002: 121]、半数以上が温州出身者であり、フランスにおける庇護申請者数の中では中国人が最も多い。つまり、浙江省出身の不法移民はオランダにも流入しているがその数はフランスが約10倍である。

また、温州と青田の出身者はたとえ北京語が話せても、集団内では温州語や青田語で会話をすること

9 「Wok」を冠した店では、客は食材を選んでその場で中華鍋でその食材を炒めてもらう。レストランという形態ではない中国料理店として、イギリスではお店で注文した後に調理する「テークアウェイ・ショップ」が、フランスでは既に調理済みの惣菜を並べて、お客の注文に応じて取り分け、持ち帰りもできるが、その場で食べる場合は電子レンジで温める「トラッタリア」が普及している。

とを好む。温州語と青田語は似ているが、北京語や広東語とは全く違う [Li 1999a: 47]。例えば、戦後最初に設立された最も会員数の多いアソシエーションである ACV (Algemene Chinese Vereniging in Nederland: 以下 ACV と略記する。) は、1947年に温州出身の行商人によって設立された [Li 1999a: 86]。その後、温州出身者以外にも会員を拡大しようとしたので、入会した香港出身者もいたが、話される言語が温州語なので馴染めず、1976年に Fa Yin という広東語を話す香港出身者を中心にアソシエーションを立ち上げた [Li 1999a: 97]。キムは、浙江省出身者というアイデンティティ形成は、オランダ人や広東人との差異の認識や特有の方言に基づくものであり、また第二世代においてそのアイデンティティは薄れていることを指摘している [Kim 2009]。

2. 新移民流入による中国系アソシエーションの変化

次に、1980年代以降の新移民の流入による中国系コミュニティの変化について、特に中国系アソシエーションの変化という視点から比較考察したい。まず、オランダの場合、新移民の主流は、浙江省出身者と中国東北部出身者である。中国系アソシエーションの変化という視点からみたオランダの場合の特徴は、特に1970年代後半以降に新しく流入した浙江省出身者が既存の中国系アソシエーションに加わったことである。

リーは、現存する中国系アソシエーションの中では会員数1,200人で最も多い ACV の1947年設立当時から1990年代後半までの発展過程について述べている [Li 1999a: 86-97]。ACV は戦後すぐに浙江省出身の行商人によって設立された。1950年代に飲食業ブームになり、行商のための商品を低価格で得たいという設立当初の目的は必要なくなり、また新中国成立後、会員を浙江省出身者だけではなく政治的に新中国支持の人々に拡大し、1970年代にはオランダの中国系コミュニティ全体を代表するアソシエーションに生まれ変わった。1970年代中頃から1980年代中頃には、中国語による刊行物を無料で配布する等のサービスや活動を拡大し、新しいリーダーも出現した。そして、ACV がパスポート申請も手助けし、新しく連鎖移民によって流入した浙江省出身者も会員として吸収したことによって会員数を増やし、中国系アソシエーションとしてのトップの座を獲得した。しかし、6、7年前の内部抗争によって分裂し現在はほとんど活動していない。

他方で、新移民は既存のアソシエーションに参加しただけではなく、新しいアソシエーションも設立した。リーは1947年から1997年までにオランダで設立された106のアソシエーションをリストアップしている [Li 1999a]。その内1970年代以前に設立されたアソシエーションは7団体だけである。1980年代から90年代にアソシエーション数がかかなり増加していることがわかる。同姓、リクリエーション、スポーツ、社会福祉、宗教、女性、医療等、様々な目的のアソシエーションが設立された。1987年にはアソシエーションのリーダーを束ねる全国組織 (National Federation of Chinese Organizations in the Netherlands) が設立された [Benton and Pieke 1998: 152]。さらに、2001年12月に更新された現在入手できる最新リスト¹⁰によると中国系アソシエーションは151団体あり、1997年から2001年までの4年間でアソシエーション数は1.5倍になっている。2010年9月に筆者がインタビューを実施

した Fa Yin 現会長によると、新旧アソシエーションには交流がありお互いのメンバーを知っているとのことであった。オランダでアソシエーションを立ち上げるのは容易で、新移民によって多くのアソシエーションが立ち上げられ、実際にはほとんど活動しないものもあり、いつのまにか消えてしまうものもあるとのことであった。

フランスの場合、新移民の主流は、オランダの場合と同じ中国東北部出身者と浙江省出身者である。特に1990年代以降に流入した浙江省出身者には不法移民が多く、既製服縫製業に就くことのできる女性が男性の2倍である。しかし、1990年代以降に流入した新移民が、新しい集住地区に新移民による新しいアソシエーションを設立したことがフランスの特徴といえる。新しいアソシエーションは、フランス人と中国系移民が共同で設立するフランコ・チャイニーズ・アソシエーションという形態であった。古くからある温州出身者によるアソシエーションもあるが、オランダの場合のように新移民がそれに参加することがなかったのは、新移民の集住地区が古くからあるアソシエーションとは離れていたこともあり、新旧のアソシエーションには全く交流がない。新移民は新しい集住地区に新たなコミュニティを作り出し、中国系コミュニティの新たな拡大が可視化されている [山本 2009b]。

イギリスの場合、新移民の主流は、中国東北部出身者と福建省出身者である。福建省出身者は、飲食業だけではなく農場季節労働や建設業や製組み立てなど、これまでイギリスの中国系移民が就労していなかった職業にも就き不法移民が多い。これら新移民は、広東語話者が主流を占める既存の中国系アソシエーションに参加することはなかった。中国東北部出身者は、学生も多く、教育程度も高く英語力もあるので、アソシエーションに頼らなくても生活できたし、福建省出身者は職を渡り歩いて定住せず流動性が高いのでアソシエーションを設立しても長続きしていない。それゆえ、中国系アソシエーションには新移民の流入による変化はあまり見られず、新移民の流入前から中国系移民は散住し、そこに流入した新移民も散住し、既存のコミュニティの外側に位置づけられた不可視な存在となっている [山本 2009a]。

以上のように、オランダとイギリスとフランスに流入した新移民が、中国系アソシエーションにもたらした変化はそれぞれ異なっている。それぞれの特徴を挙げるなら、オランダの場合は新しいアソシエーションが多数設立される一方、浙江省出身者による旧アソシエーションに新しく流入した浙江省出身者が加わり発展したアソシエーションもある。フランスの場合は新移民が別の集住地区を作り新しいアソシエーションを立ち上げ、イギリスの場合は福建語や北京語話者が主流の新移民は、広東語話者が主流の旧アソシエーションに入らず新しいアソシエーションも立ちあげなかった。以上から、新旧移民の出身地や使用言語や職業、居住形態等の要因が複雑に絡み合っ、新移民の流入が3国の既存の中国系コミュニティにそれぞれ異なった変化を及ぼしていることがわかる。

他方で、オランダの中国系コミュニティは、浙江省出身者が流入しているという点ではフランスの中国系コミュニティと共通している。しかし、新移民流入後も職業は多様で集住しているという特徴

10 中国系アソシエーション「Wah Fook Wui」のHPに掲載されているリスト。

を保持したフランスと違って、新しく流入した浙江省出身者がコミュニティの主流を占めていた香港出身者と同じ飲食業に就き散住したことによって、新移民流入後も香港出身者が主流のイギリスの中国系コミュニティと共通の特徴を保持した。結果として、新移民流入後の3国の中国系コミュニティの特徴は変化しなかったといえる。

3. 中国語補習校における変化

中国語補習校とは、正規の学校以外で中国語教育を実施している学校を指す。ヨーロッパには全日制中華学校はなく、中国語教育の中心的役割は週末や放課後の中国語補習校が担っている。新移民の流入は、3国の中国語補習校に大きな変化を及ぼした。

オランダに中国語補習校が設立されたのは、第二世代が増加した1970年代中頃であり、オランダ中国語補習校全国協会 HP によると全国に44校ある¹¹。この組織はオランダの中国語補習校を束ねる組織で、2年に1回中国語スピーチコンテストを開催している。最初の中国語補習校は、1976年にアムステルダムの香港出身者によって Fa Yin 設立と同時に設立された [Li 1999a: 98]。2010年9月に筆者が実施した Fa Yin の運営する中国語補習校校長へのインタビューによると、学んでいる子どもはオランダ生まれの第二、第三世代で、親は香港出身者が多い。広東語の読み書きを中心に教えてきたが、2年前から簡体字とピンインによって北京語も教えている。広東語は幼稚園レベルからあるが、北京語は小学校4年生以上からのクラスしかない。

また、香港出身で1966年にオランダ人男性との結婚でオランダに在住することになった現在70歳の女性は、オランダ語と広東語が理解できるので親達に子どもに広東語を教えてほしいと懇願されて1979年に中国語補習校を立ち上げた。この女性は、中国人家庭を訪問した経験から、世代間のコミュニケーション・ギャップを埋めるために広東語を教える必要を痛感した。政府からは資金援助を受けることができず、夫が個人的にお金を出してくれた。設立当初は生徒6人であったが、1990年代後半には生徒数が500人まで増えたが、現在は55人に減った。最初は子どもの母語である広東語クラスだけであったが、5年前から北京語クラスができ、現在は北京語クラスだけになった。彼女は、1986年には通訳や情報提供やオランダ語教室開催等の活動をするアソシエーション Wa Lai を設立し、現在女性クラブには約130人が登録し京劇や歌を練習している。中国語補習校で9年前に始まった大人向け北京語クラスは生徒数が増え、現在約50人になっている。

以上のような Wa Lai や Fa Yin によって1970年代に設立された中国語補習校の生徒数が減少しているのとは対照的に、2011年9月に筆者が訪問したアムステルダム南部に開校されたばかりの中国語補習校は、生徒数約200人で、北京言語文化大学出版の刊行する英語版の新しく開発された教科書を使い、教師は高学歴で経験豊富の人を選び、将来的に生徒数を4倍に拡大しようとしている。広東語クラスが2クラスと北京語クラスが7クラスある。校長であるオランダ在住16年の中国人女性は、大人

11 <http://www.chineesonderwijs.nl/index.php?id=8>

向け北京語学校をオランダで既に4校開校していて、旧来の母語教育として始まった中国語補習校とは異なった新しいタイプの中国語学校を展開しようとしている。

また、ユトレヒトにある中国語補習校は30年前に開校した。2010年に筆者による副校長へのインタビューによると、開校時の生徒数は約40人であったが、現在は22クラスで生徒は約500人、生徒の6割は温州出身者、2割は香港出身者、1割はオランダ人と国際結婚をした中国人を母親に持つオランダ生まれの第二、第三世代である。30年前は親の大部分は香港出身者で全クラスで広東語が教えられていたが、1990年代からの浙江省出身者の増加に伴い、20年前に簡体字とピンインによって北京語を教える2クラスができた。最初は浙江省出身者を親に持つ子どもも、オランダの中国系コミュニティにおいてコミュニケーションに用いられる主流言語である広東語を中国語補習校で学んでいたが、1997年香港返還後は、特に北京語を習う子どもが増え、中国本土からの新移民の流入増加も影響をし、4年前から全クラスで北京語を教えるようになった。以上から、オランダの中国語補習校は、母語教育から北京語教育へと、その役割がかなり変化していることがわかる。

筆者はイギリスとフランスにおける中国語補習校についても、現地調査に基づいてその役割と課題について比較検討したが [山本 2007a]、両国で簡体字とピンインによって北京語を教えるクラスの増加という近年の動向が共通にみられた。イギリスはオランダと同じように戦後、香港出身者が中国系コミュニティの主流を占めていたので、母語教育のために設立された中国語補習校には広東語クラスしかなかったが、1997年の香港返還後は、北京語クラスが急増している。

フランスの場合は、特に1970年代を中心に中国系インドシナ難民が流入したという歴史的経緯が、中国系移民の言語的多様性を生み出した。家庭で話されている中国語方言は温州語、広東語、福建語、潮州語など多様であり、中国語補習校では、設立当初から共通語として汎用性の高い北京語が教えられてきて、広東語が教えられたことはない。中国系インドシナ難民であった親は、自らが渡仏前に使用していた繁体字と注音字母によって北京語を教えるクラスに子供を通わせていたが、近年、中国の経済的上昇を鑑み、簡体字とピンインによって北京語を子供に教えた方が将来性があると考え、そのクラスが増加している。また中国本土からの新移民の子どもの増加も簡体字とピンインによる北京語クラスの増加を導いている。

以上から、3国の中国語補習校には、簡体字とピンインによる北京語クラスの増加という共通の傾向が指摘できる。様々な出身地や言語的多様性をもつ中国系移民が、次世代に簡体字とピンインによる北京語を教えようとする共通の傾向は、中国の経済力が益々高まり北京語のニーズが高まれば、今後さらに強まると考えられる。3国への新移民の流入は、各国の中国系コミュニティにおける簡体字とピンインによる北京語の重要性を高めただけでなく、ヨーロッパにおける簡体字とピンインによる北京語を核とするトランスナショナルな中国文化圏を形成しつつあるといえる。

おわりに

本論は、オランダの中国系コミュニティの特徴と新移民の流入による変化を、イギリスとフランスの場合と比較検討した。オランダとイギリスの中国系コミュニティのもつ飲食業に集中し散住という共通の特徴が、両国における次世代のアイデンティティ形成過程に共通性をもたらしていた。また、新移民流入後の簡体字とピンインによる北京語クラスの増加という3国の中国語補習校にみられた共通の変化は、ヨーロッパにおける北京語を核とする中国文化圏の形成を示唆していた。本論では、先行研究の少ないオランダの中国系移民をフランスとイギリスの中国系移民と比較することによって、トランスナショナルな枠組みから次世代のアイデンティティ形成や文化の継承に関わる問題を捉えることができ、比較検討の重要性を示せたと考える。

附記：本論は文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）（2）（課題番号20530785）研究課題「EUにおける中国系新移民の学校不適応に関する教育人類学的研究」（研究代表者：山本須美子、平成20年度～23年度）の研究成果である。

【参考文献】

山本須美子

- 2007a 「EUにおける中国語補習校の役割と課題—イギリスとフランスの比較から—」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』7: 175-194。
- 2007b 「EUにおける中国系二世世代のアイデンティティ—イギリスとフランスの比較から—」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』42: 43-50。
- 2008 「ヨーロッパ華僑華人研究のフロンティア」『華僑華人研究』5: 242-249。
- 2009a 「イギリスにおける中国系アソシエーションと新移民の流入」『東洋大学社会学部紀要』46-2: 159-179。
- 2009b 「フランスにおける中国系アソシエーションと新移民の流入」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』44: 57-74。

Archer, Louise and Becky Francis

- 2007 *Understanding Minority Ethnic Achievement :Race, Gender, Class and Success*, London: Routledge.

Benton, George. and Frank N. Peike (eds.)

- 1998 'The Chinese in the Netherlands', In *The Chinese in Europe*, Benton, George and Frank N. Peike (eds.), pp.125-167, London: Macmillan Press LTD.

Kim, Kuo

- 2009 *Migrants from the Wenzhou Region in the Netherlands: A Generational Perspective*, MA Thesis submitted to International School for Humanities and Social Sciences, University of Amsterdam.

Li, Minghuan

- 1999a *We Need Two Worlds: Chinese Immigrant Associations in a Western Society*, Amsterdam: Amsterdam University Press.
- 1999b 'To Be Rich Quickly in Europe: Reflection on Migration Motivation in Wenzhou', In *Internal and International Migration: Chinese Perspectives*, Pieke, N.Frank and Hein Mallee (eds.), pp.181-198, Richmond: Curzon Press.

Marc, Paul

- 2002 'The Dongbei: The New Chinese Immigration in Paris', In *Globalizing Chinese Migration: Trends in Europe and Asia*, Nyiri, Pál and Igor Saveliev (eds.), pp. 120-128, Aldershot: Atheneum Press Ltd.

Office for National Statistics

2001 *Census 2001, Population of the United Kingdom: by ethnic group*.

Thunø, Mette

1999 'Moving Stones from China to Europe: The Dynamics of Emigration From Zhejiang to Europe', In *Internal and International Migration: Chinese Perspectives*, Pieke, N.Frank and Hein Mallee (eds.), pp.159-180, Richmond: Curzon Press.

Pieke, N. Frank

1988 'The Social Position of The Dutch Chinese: An Outline', *China Information* III - 2 : 12-23.

1991 'Chinese Educational Achievement and "Folk Theories of Success"', *Anthropology & Education Quarterly* 22: 162-180.

Pieke, N. Frank and Xiang, Biao

2008 *Legality and Labour: Chinese Migration, Neoliberalism and the State in Great Britain and China*, The Paper of Presentation at University of Oxford.

Watson, James. L.

1975 *Emigration and the Chinese Lineage: The Mans in Hong Kong and London*, California : University of California Press.

Witte, Lilly

2009 *I Feel Like a Bababa; Yellow From the Outside, White From the Inside, Ethnic Identification of Second Generation Dutch Chinese People*, MA Thesis submitted to Faculty of Social Sciences, Vrije University Amsterdam.

【インターネット資料】

Netherlands Central Bureau of Statistics HP

<http://statline.cbs.nl/StatWeb/publication> (2011年3月5日参照)

Wah Fook Wui HP

<http://www.wahfookwui.nl/default.htm> (2011年6月25日参照)

Stichting Chinees Onderwijs HP

<http://www.chineesonderwijs.nl/index.php?id=8> (2011年11月1日参照)

【Abstract】

The Historical Development and Characteristics of the Chinese Communities in the Netherlands: The Comparison among the Netherlands, the U.K. and France

Sumiko YAMAMOTO

The purpose of this study is to examine the historical development and characteristics of the Chinese communities in the Netherlands and compare them with those in the U.K. and France, based on the field work conducted at Amsterdam, Utrecht and Rotterdam in September 2009, 2010, and 2011. And through these comparisons, this study aims to grasp the issues about Chinese culture and the formation of identities from a transnational viewpoint.

Chapter I traces the historical development of the Chinese communities in the Netherlands, dividing it into three periods, the period before 1949: the construction of the People's Republic of China, the period from 1950 to 1975: the independence of Suriname and the period from 1976 to the present.

Chapter II examines characteristics of the Chinese communities in the Netherlands and compares them with those in the U.K. and France.

Chapter III clarifies the influences of the influx of new Chinese immigrants since 1980s, by examining the changes of Chinese associations and supplementary schools offering Chinese language education comparing them with those in the U.K. and France.

As a result, immigrants from Hong Kong to the U.K. and the Netherlands reaching the peak in 1960s have constituted the mainstream of the Chinese communities in both countries. Their tendencies to concentrate in restaurant business and scatter all over the country have been the common characteristics of the Chinese communities in the U.K. and the Netherlands, which have created the similarities in the processes to form identities of second generation Chinese in two countries.

Whereas, the refugees with ethnic Chinese background from Indochina mainly constituted the Chinese communities in France before 1980. No job concentration and gathering in some

specific areas have been characteristics of the Chinese communities in France. Since the 1990s people from Zhejiang have immigrated to both France and the Netherlands. Most people from Zhejiang to the Netherlands have been engaged in restaurant business and scattered all over the country, while most of them in France have been engaged in various jobs and gathered in some specific areas.

In sum up, this study clarifies that characteristics of the Chinese communities in three countries haven't been changed after the influx of new immigrants. And it also points out that the classes in supplementary schools that teach Mandarin with simplified characters and *pinyin* are increasing in three countries. I can suggest that the core of Chinese culture in EU will become Mandarin with simplified characters and *pinyin* in the near future.